

英語をどのように教授しているか

英語をどのように教授するのかについて、簡単に説明したい。

英語をみて、日本語を並べ、関連する文法事項を説明する、というのが、普通の英語の授業と思う。このような授業形式に欠けているのは、「英語の読み方」という概念だ。本来は、英語の読み方を教授して行かねばならない。

英語の読み方というのは、文法事項をどのように使うかという知識の活用の仕方を基礎としている。その読み方は、2つの層があり、1つは、文法事項の活用の仕方、もう1つは、言語を理解して行く際の基本的な思考様式だ。その項目の数は、数え方にもよるが、十数個程度のものだ。それを中学校の基礎文法が終わった程度の子に対して、代替15回程度の授業で教える。この内容は、どの英語を読む際でも、必ず使う技法であり、多くの印欧語で共通に使う手法だ。その手法は、学校で与えられている英文でも、参考書のものでも、全く共通に使用するものだ。

ここでは、大体、第1回から第5回までの学習を終えた後の形を示す。

以下の下線を付した英文を日本語に訳しなさい。

(a)

It was one of those Saturdays upon which she had had to work at her office. What was more, it was a wet Saturday: all the possibilities of fine Saturday afternoons fled from her, as she came home, steaming, in the bus, which smelt of people's rainproofs and wet skin and hair. To add to this it was a wet Saturday in summer that dreariest of all occasions, when the greenness of the season calls the people of London out, even into their suburban parks, and the weather forbids.

ここで考えるべきことは、(1) 論点の抽出(試験に特有の作業)、(2) 判別と処理(文章を読む際に共通の操作)。

主要論点としては、**when** の機能、**it** の機能、挿入句の処理という3つである。

具体的な処理の流れとしては、

下線部に SVOC という記号を付す。形容詞は()、副詞は< >で示す。

<To add to this> it was a wet Saturday in summer, <that dreariest of all occasions>, (when the greenness of the season calls the people of London out, <even into their suburban parks>, and the weather forbids).

主文は、it was a wet Saturday <in summer>

S V C

論点1：It の判別：形式主語、指示語（単数名詞、漠然とした状況）、気候・天候の it、のいずれか。

補語が a Saturday なので、天候・気候の it である。

処理：it を訳さない。「S は C です」という形の文で、S が現れない形になる。

訳：「 <夏の>雨降りの土曜日 だった」

(S) C V

論点2：<that dreariest of all occasions>

これは挿入句である。挿入句であるということの判別は、文の中で、有機的な構成要素になっておらず、他の語句 ‘a wet Saturday <in summer>’ と when 以下の同格（言い換え）になっていることから判別できる。

論点3：主文の従属節となっている when 以下を処理する。

when の判別：は、副詞節であるか、形容詞節（関係副詞）、名詞節、である。When が副詞節である場合、主節の was の意味を規定していなくてはならない。when 以下は現在形で、普遍的な事実を示しているので、主節の過去時制を規定することができない。従って、この when は形容詞節であり、この場合は、関係副詞節として形容詞節を形成している。＜関係詞：接続詞＋指示語：2文に分ける＞ので、

when 以下は、

on a wet Saturday in summer the greenness of the season calls the people of London out.
と書き換えられる。

SVOC と記号を付して、

<on a wet Saturday in summer>

the greenness (of the season) calls the people (of London) <out>
S V O adv

SVO は「S が O を V する」という意味なので、

「(その季節の) 緑が、 (ロンドン中の) 人々を <外へと> 呼び出した」
S O V

となる。

これらの要素をまとめれば、

「<これに加えて>、(季節の緑が ロンドン子を 外へ、郊外の公園の中へさえ、誘い出し、そして、天候が妨げる)、<全ての場合で最も恐ろしい>、夏の雨降りの土曜日であった。」
改めて見て、

<To add to this> it was a wet Saturday in summer, <that dreariest of all occasions>, (when the greenness of the season calls the people of London out, <even into their suburban parks>, and the weather forbids).

「<これに加えて>、(季節の緑が ロンドンの全ての人々を 外へ、<郊外の公園の中へさえ>、誘い、そして、天候が妨げる)、<全ての場合で最も恐ろしい>、夏の雨降りの土曜日であった。」

上のように主文が BLOCK で、従属節（形容詞節）が斜字体である。

形容詞節の意味上の働き方は、

a Saturday in summer = the greenness of the season calls the people of London out, <even into their suburban parks>.

wet = the weather forbids)

である。

「夏の土曜日」＝ロンドン子が、緑を求めて外出しようとする

「雨降りの」＝その天候が妨げる

というように、「最も素晴らしいこと」と「最も忌むべきこと」が同時に起こっていることを、that dreariest of all occasions と言い換えていることが分かる。

試験の和訳の文は、このように、与えられた英文の論点を抽出し、その論点に含まれている諸点をどのように理解したかを示すためのものである。だから、自然な日本語であることは求められていない。

挿入句が、主節と従属節の間にあるのであれば、そのように、冒頭にあるのであれば、そのように、全体が1つの文であれば、そのように、「何も足さない、何も引かない」で、あるがままに処理すればよい(being の意味上の補語が inactive であるから、その間の I suppose は挿入句と判定できる)。

【解答例1】

これに加えて、それは夏の雨の土曜だったのだ。これほど最悪のときはない。夏の緑が人々をロンドンから連れ出そうと手招きし、せめて郊外の公園にでも行こうと思うのだが、天候がそれを許してくれないのである。

【評】「それは」とか「思うのだが」というような論点に対する解答として正しくない、あるいは、原文に存在していない単語を補充しているのでよくない。「これほど」というのは that の処理として正しくない。この that は the を強調したものであるからだ。

【解答例2】

それに加えて、時は夏の雨の土曜、どんな時より一番憂鬱な時であった。季節の緑がロンドンの人々をそとへ、郊外の公園へとすら誘っているのに、天候が阻むからである。

【評】 **when** を理由として「…からである」と訳しているのが、主要論点への回答として正しくない。**when** 以下は「夏の雨降りの土曜」という名詞を修飾している形容詞句として訳出されなくてはならない。**People** は集合名詞であり、通常は不特定多数であり、特定ができないので **the** を付さない。**the** が支配しているということは、この **people** は特定されている集団であるということなので、「ロンドン子」とか「ロンドンの全ての人々」という意味になる。

このように、「なぜ、そのように解釈されるのか」、「なぜこう解釈はされ得ないのか」ということを考えることが大切なのである。このような思考の過程を直接説明されては、文章の分量が多くなってしまうので、採点の場においては煩雑であるから、それらの思考を踏まえて、結論だけを明瞭に書きなさいというのが、訳文で求められていることである。

詰まり、「この **when** は、名詞節、形容詞節、副詞節の3つの場合があって、名詞節であれば主文において、主語、目的語、補語のいずれかであり、副詞節であれば、主文の動詞、形容詞、副詞のいずれかの意味を、程度・頻度において規定していなくてはならず、いずれでもないのが、形容詞節であると判別することができる。しかるに、形容詞節であるとする、先行名詞の内容を規定していなければならないが、その通りになっており、且つ、そのことに注意喚起する挿入句が存在しているので、この解釈で正しいと判断できる」というような、なぜ、そう解釈するのかということの論理的思考に裏付けられていなくてはならない。

「ぼんやりとなんとなく、こういうような意味である」というようなことでは、いつまでたっても正しく読めるようにはならない。

訳文を読めば、「ああ、この人は、ここの部分をこのように解釈したのだな」ということが判然としなくては、正しい勉強とは言えないのである。本問では、答えは **when** を副詞節ではなく、形容詞節として判別したことを明確に示さねばならない。

この例題は、東大の入試問題から採ったものである。求められていることは、中学の基礎の正確な理解である。意外なくらいに、中学の基礎を正確に理解することは難しいものである。

以 上 2018.06.17 矢野